

フジミドリシジミは1910年に富士山の中腹で発見されたことにちなんで命名されたもので、大学の後輩が採集した標本を見せてもらったのが初の出会いで1968年のこと。その後、加古川の里山・ギフチョウ・ネットのメンバーでカメラ撮影技術がプロ級の立岩さんや板野さんたちが見事な写真記録を披露してくれるのをうらやましく眺めるだけで、ゼフィルスの中ではいまだに最も出会えるチャンスが少ない種となっている。筆者にとって高嶺の花的希少種と位置付けられる本種に、意外な時期に偶然出会えたのが長野県下伊那郡の大鹿村。

July 23, 2014 大鹿村でフジミドリシジミに出会う

时期的にキベリタテハは無理だとしてもクジャクチョウには会えるかもしれないと、飯田からしらびそ高原へと向かって走ると、矢筈トンネル経由のルートが通行止めとなっているからとカーナビが大鹿村から地蔵峠を経由する大回りの迂回ルートを指示してくる。大鹿村経由でしらびそ高原へと向かうのは初めてで、これまでにないチョウとの出会いを期待して山道へと入る。途中、休憩タイムをとったカーブ地点で周辺をチェックしていると、妻が「頭の上の葉っぱに何かいるよ」と教えてくれ、ビデオカメラを準備してはっきり映像としてとらえると、何とウラキンシジミ。新鮮度は低いはまだ金色鱗粉は残っており、本種の撮影記録は初めてのこと。何度となくいいことが起こる地点で休憩タイムをとり、さらには思いがけないチョウを発見してくれる妻には感謝の気持ちでいっぱい。ウラキンシジミがとまっていた葉はコナラのように見えたが、すぐ隣にトネリコがあって本種がいたことに納得。しらびそ高原では期待したクジャクチョウには出会えずアサギマダラをみただけで、帰路に再度このコーナーでチェックをすると、小さなチョウがフラフラと飛び出し、道路上に静止したかと思うとまた飛びそうな気配にネットインをして確認する。すると、なんと初めて実物を見るフジミドリシジミのくたびれた♀。自然状態の撮影記録が撮れそうにないので放してやると、よろよろと飛んで道路下の樹の枝葉部分へともぐりこむが、その樹はまさしくブナの木で、このような高標高でもないところでもフジミドリシジミが発生することを知る。今にしてみれば痛みがひどい個体だからと撮影記録を撮らなかったのが悔やまれるが、できればこのブナの樹を目印としていつか発生初期にここにきてみたい。